

今日的な教養と教養教育

教養教育・共通教育検討分科会の議論から

教養教育・共通教育検討分科会副委員長
 小林傳司(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)
 公開シンポジウム
 大学教育の分野別質保証に向けて—日本学術会議からの報告—
 2009年11月23日(東京大学安田講堂)

「教養」と教養教育と大学

大学の重要なミッションの1つ

- 「教養」を授けること

教養教育

- 「教養」を授けるための教育の1つ
- 「教養」は専門教育を通じて授けるべき

「教養」として何を考えるかを提示しよう

- 網羅的でなく、基準としてでなく、「提案」として:「市民性の涵養」

教育手法の改革が必要

「教養」について

教養

- 論者の数だけある「教養」観
- 誰もが大事だと言う「教養」
- 設置基準の大綱化以後の動きへの反省

「教養」観

- A: 古典重視
- B: Aは失効した→新たな「教養」観へ

A: 古典重視

書物と自由学芸によって予め陶冶し、智恵を受け入れる手ほどきと準備を(キケロ): 階級社会

近代=産業=市民社会参入のパスポート

日本:

- 誰もが百科事典を買い、文学全集を買った時代
- 西洋への憧れ
- 経済成長・福祉社会→明日はより豊かに
- 都市化
- 企業への就職

1970年代頃まで

B: Aは失効した

1970年代

- 絶対的貧困からの解放
- 経済成長・科学技術への懐疑(モノの豊かさより心の豊かさ)
- 反権威主義
- 進学率上昇
- 価値観の多様化(個人化: 学びの意味が個人の内面へ)

1990年代

- グローバリゼーション
- 格差社会(大卒者も不安定生活)

どうするか?

A: 古典・権威の復活へ

- 無理ではないか
- 今日的教養の中心とはなり得ないのではないか

B: 自立した強い個人としての市民育成

- 学際性/実用性/倫理/思考力(critical thinking)……
- 「社会人基礎力」など産業界からの注文への対応
- どれも大事だけれど……

本分科会のスタンス

強いて言うなら、Bに近い

- しかし、大学は保守的な制度(Aの要素の尊重)
- 「教養」: 市民性の涵養

なぜ?

- ユニバーサル段階の大学のミッション
- 幅広い年齢層、多様な背景を持った市民の学習の場
- 異質な他者との協働
- 「市民は現状の社会の問題を把握し、作り変える主体であるべき」

「市民性」

- 社会の公共的課題の発見
- 解決のための協働(連帯)の能力

大学における「教養」の授け方

Aの側面を残すことも重要
Bの側面の読み替えと受容

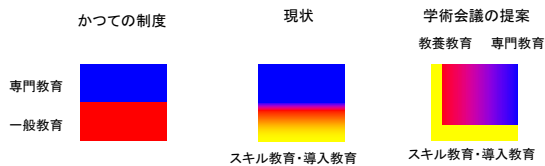
「自立した強い個人」→「協働・連帯する諸個人」
➢ 現代的レリバンスの重視

いくつかの着眼点

- 現代社会の諸問題
- 文系と理系の問題
- 市民性涵養のための古典教育
- 「国際語としての英語」教育と外国語教育
- 学問の体系性

教育手法の改革

教養教育と専門教育の関係の問題



教育手法の改革

Teaching から Learning へ

- 参加型学習
- コミュニケーション教育
- スキル(これ自体を「教養」の目的とするわけではない)

能動性: 活動させながら教育する

- フンボルト理念「研究させながら教育する」

専門教育との関係

- 「教養」は専門教育を通じて授けるべき
- 分野別質保証の議論においても留意

誰が教えるのか

「教養」を授けるための教育の担い手は?

- 大学院教育の問題
- 大学の外の「智」や「技(スキル)」の導入

大学は社会とどう向き合うのか

- 超然とすれば良いわけではない
- お先棒を担げば良いわけではない

まとめに代えて

「教養」を授けることは大学の使命

定量的評価によって測定する
のが難しい教育の典型

それにしても、大学の教師
にもう少し時間を与えてく
れないと.....

社交空間としての大学

- 隠れたカリキュラムの大事さ
- これは設計できない自生的伝統

それぞれの大学において、建学の理念のもと、「教養」を授ける
ための教育について、真剣に議論されることを期待する。